君や来し　（狩の使）　伊勢物語　六十九[1]

伊勢斎宮は占いで決められた皇女が仕える神聖な職で一生結婚はできない定めである。

昔、男ありけり。その男伊勢の国に狩の使にいきけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「つねの使よりは、この人よくいたはれ」といひやりければ、親のことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩にいだしたててやり、夕さりは帰りつつそこに来させけり。かくてねむごろにいたつきけり。

二日といふ夜、男われて「あはむ」といふ。女もはた、いとあはじとも思へらず。されど人目しげければえ逢はず。使ざねとある人なれば遠くも宿さず。女の閨近くありければ、女人をしづめて、子ひとつばかりに男のもとに来たりけり。男はた寝られざりければ、外の方を見出だして臥せるに、月のおぼろなるに小さき童を先に立てて人立てり。男いとうれしくて、わが寝る所にゐて入りて、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らはぬにかへりにけり。男いとかなしくて寝ずなりにけり。

つとめていぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いとこころもとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより詞はなくて、

君や来し我や行きけむおもほえず夢か現か寝てかさめてか

男いといたう泣きてよめる、

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひさだめよ

とよみてやりて狩に出でぬ。野にありけれど心は空にて、こよひだに人しづめていととく逢はむと思ふに、国の守斎宮のかみかけたる、狩の使ありと聞きて、夜ひと夜酒飲みしければ、もはらあひごともえせで、明けば尾張の国へたちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せどえ逢は

1 傍線は読解に役立つ重要語だから辞書で調べること。数字は単なる注釈ではなく読解で意識するポイント。タイトルも段番号も元々は書かれてないので、教科書によって違いがある。

ず。夜やうやう明けなむとするほどに、女がたより出す。杯の皿に歌を書きて出だしたり。とりて見れば、

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば

と書きて末はなし。その杯の皿に続松の炭して歌の末を書きつぐ。

又あふ坂の関はこえなむ

とて明くれば尾張の国へ越えにけり。斎宮は水の尾の御時。文徳天皇の御女、惟喬の親王のいもうと。[2]

御簾の内で生活していた平安時代の貴族の女性だが、まるで現代の出会いでもあるように語られる。斎宮恬子の強い意思が表われているといえそうだ

2 業平が親しくしていた若い友人の惟喬親王の妹、恬子（やすこ）のこと。後に彼女は業平の子を生むが、斎宮であるため密かに養子に出さざるを得なかった。